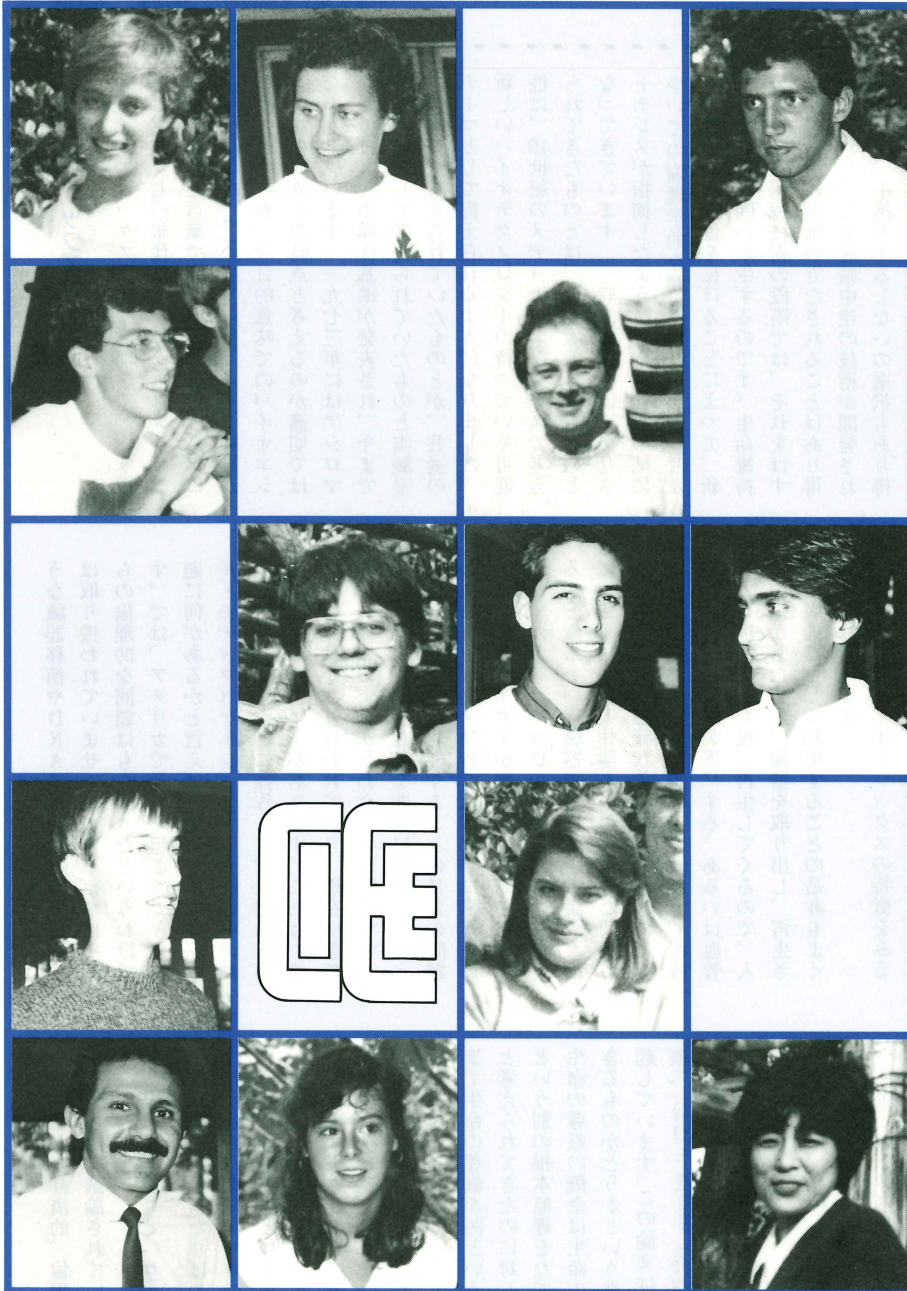
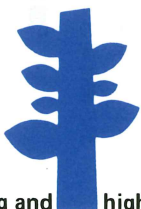


SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'87冬



- 第137回大学共同セミナー
- 生命倫理を考える
- 第23回大学教員懇談会
- 大学教育の充実と個性化
- 第13回国際学生セミナー
- へ開かれた日本・総点検
- 業務通信 — 初めてのセメスター・プログラム —



Plain living and high thinking

No.105

バイオエシックスの基礎

千葉大学文学部教授 加藤 尚武

バイオエシックスの成立

バイオエシックス（生命倫理学）という言葉は、一九七〇年代に入ってからアメリカで使われ始めた言葉です。一九七三―七八年に『バイオエシックス百科辞典』という叢書が刊行されたのが、今日の意味でのバイオエシックスの成立した時点と考えるのが適切ではないかと思えます。一九七三年にはアシロマ会議でDNAの操作基準が発表され、今まで医療問題として考えられていたものと実験室レベルで考えられていたものが、共通のテーマとして捉えられるようになりました。

新しいバイオテクノロジーの持っている可能性は、19世紀のメデイカルエシックスで考えられてきたものとは、大変次元の違うものとなってきたと思います。一般的に言えば、アリストテレスが指摘したように、不可能な事柄についての倫理的な問いは成り立ちませんが、技術が可能性を拡げることによって、新しい倫理的な問いが生ずるのです。生命維持装置のない医療技術の段階では、それをはずす決断の前に医師が立たされることはあり得なかつたし、人工妊娠中絶の技術が開発されなければ、中絶をしないの選択もあり得なかつたわけです。ところが、20世紀後半に至って、倫理学の伝統的な問いが見込んでいた人間行為の可能性が大幅に変化し、そういう条件の変化が倫理学そのものに大きな影響を与えることになってきたのです。

最近のアメリカのバイオエシックスの内容を検討してみると、標準的なバイオエシックスの教科書では、日本で話題になってい

②

ような臓器移植やDNAの操作基準の問題などは取り扱われていません。アメリカではこれらの倫理的な問題はもう終わったというわけです。では、アメリカで新しく起こってきた問題に何があるかと言えば、まずサイコロジカル・モディフィケーション——大脳の中の神経をいろいろ技術的に操作して、人間の精神を支配する問題——があります。これはすでに動物ではかなり行われており、現在は霊長類についての実験が行われている段階です。

また、逆に人間の尊厳を非常に傷付けるような実験を動物についてやることは是非の問題もあります。アメリカでは、すでに臓器売買のコーディネーターが職業として成り立っていますが、それをブローカーとして合法化するかどうかという臓器売買に関する議論も出ています。また人体論も一つの大きな問題です。たとえば、脳死状態の人体を使って、生きた状態で学生に解剖実験をさせたり、血液やホルモンの製造装置にする。あるいは血管などは取り出した後、再生してくるので、人体を生かしたまま、臓器を取り出し、再生させる製造器として利用することの是非もよく議論されています。

アメリカのバイオエシックスの特徴をみると、そこには技術が社会的に応用される前に倫理的な議論をしておこうという予見的な性格が見られます。ある大型プロジェクトの一部にバイオエシックスの組み込まれたものがあり、その実験計画書には家畜で用いられた技術をどの程度人間に用いてよいか、また、代理母の問題をはじめ、精子や卵子だけではなく、子宮の提供などいろいろな臓器を授受

する問題が、経済的、倫理的、法律的な観点から先行的に議論されています。

「生命の尊厳」と「生命の質」

これまで行き当たりばつたりの寄せ集めの性格が強かったアメリカのバイオエシックスは、現在では反省と体系化の時期に向かっていっていると思います。ここでは、原点に立ちかえってカイサーリンク (E. W. Keyserling) の SOL (Sanctity of Life: 生命の尊厳) と QOL (Quality of Life: 生命の質) という概念を紹介したいと思います。彼の論文は、今まで生命の尊厳が医という営みの究極の原理と考えられてきたのに対し、そこに生命の質という別の根本原理をたてるとうなるか、生命の尊厳の概念は生命の質の概念と両立できるものかどうかという厳しい問いかけを提起しています。この論文は、SOLを cure (治療)、QOLを care (介抱) に対応させて、terminal care やホスピスなど、care を中心とした医療の概念を展開していく原点となったものです。

それでは、QOLやSOLとは一体どのような概念なのでしょう。たとえば、癌でもう苦痛しかない患者や無脳症の赤ん坊を安楽死させることは、大まかに言えば、killing (殺すこと) です。英語では、killingの代わりに termination (終わらせる) とか causing death (死をひき起こす) などの言葉が使われますが、生命を存続させる技術が発達した結果、どうしても killing という要素が入ってきて、それを正当化せざるを得ない。その基準を決めるのがバイオエシックスの一つの



大きなテーマになっているのですが、ここに QOL という原理を導入するとどうなるでしょうか。生命の質とは、本人にとっての主観的な快苦から成り立つものです。「この人は生きていく意味があるかないか」など、生命の質を考えるとどうしても医療行為の選択に際し、客観化できない基準を導入することになり、他人の生命に対して相対的な価値を当てがうことが避けられなくなってしまうのです。これは、絶対的な価値である SOL の立場とは両立不可能です。SOL では、「人間の生命はそれが存在するという事実によって神聖なのであり、生命の価値はその生の何らかの条件や完全性に依存しない。それゆえ、人間の生命はすべて等しい価値を持ち、生きるための等しい権利を持つ」と考えるからです。それは、「生命の価値」をその生命体の置かれている状態に依存しないものと考え、すべての人間の生命を等価値として認めているのです。

医療における人格性

— care and cure —

このように、SOL と QOL は両立できない原理だとされてきたのですが、それに対してカイサーリンクは、この両立不可能性を前提にしたならば、もはや現代の医療は成り立たないだろうと考えました。SOL 原理だけで医療を行えば、「患者を一秒でも長く生きさせるべきだ」という極めて客観的な基準ができるのに、なぜ今 QOL を導入しなければならぬのかと言えば、それはもはや延命を停止するという選択が不可避になってきてい

るからです。彼は、生命の質の概念を単に物質的な質と捉えるのではなく、より人格的なものと考えようと思いました。彼は、人間の生きる意味を対話可能性に見出し、苦痛から解放することだけが質 (quality) ではなく、それによって周りの人々と対話可能な状態で生き続けることを質の概念の中心的意味に置こうではないかと提案しています。このカイサーリンクの論文は、今では、バイオエシックスの古典中の古典と言われるものですが、この論文は最後に、「医学は、大部分、*win-win* に努めることをいつ止めるか、そして、どのようにして *game* を続けるかを知る技術なのである」と述べ、*game* から *care* への転換点を判断することが医学の技術だとしています。彼は、この二つの概念が決して単純に両立可能なのではなく、絶えず対立し、動揺することを明らかにし、その都度判断を要するような問題にこそ、医療の肉体的な意味の重点が置かれるべきことを主張したのです。

最後に、今までのバイオエシックスにおけるいろいろな議論の型を整理してみると、その中心の一つに *self-decision* (自己決定) の権利があります。人工妊娠中絶にしても、安楽死にしても、それを当人が決定してよいという権利です。しかし、瀕死の人に「生きるか死ぬか」と聞いても答えられないように、自己決定権だけが基準だとするならば、実際にはほとんど使いものになりません。結局自己決定権は *proxy consent* (代理同意) という概念を確立しなければ、実用品にはならないわけです。また、いろんなことが許されると、滑り坂をどんどん転がってゆくように最

終的にどこまでゆかかわからなくて怖いという議論 (*slippery slope argument*) があります。どんな技術でも許されることになると、たとえば、脳死者をいつまでも生かしつづけて血液や移植用の材料を採る機械として利用するということも行われるようになるでしょう。「ぞっとする」とか「きみが悪い」とかいう感情が起りますが、これはつきつめれば、人間が原始時代から持ちつづけている生命感情です。死体にだつて靈魂があるというアニミズムです。このアニミズムの権利は否定されてはならず、ともかくも留保される必要があります。自己決定の範囲内で、「私はどうしてもいやだ」と言う人がいた場合、理由がなくても、それは認められなければならない。

日本では、現在バイオエシックスの問題ではないと考えられているものに、限られた医療資源をどうやって配分するかといった *allocation* (配分) の問題があります。アメリカでは、たとえば心臓移植をした場合と心臓を内科的に処理した場合とで、その患者が一年間生きるのに要する費用がどう違うか、大変大きな論議をよんでおり、国民総生産に占める医療費の率を医療効率を落とさずに現在の約一〇%からさらに下げるといふ目標が追求されています。バイオエシックスの問題は、すべてこの資源配分 *allocation of scarce resources* に帰着するとの認識が多くの人々に共通に持たれています。この問題はトータルな意味で医療全体に関わる大変重要な問題だということを最後に付言して、私の話を終えたいと思います

(文責・編集者)

第137回 大学共同 セミナー

生命倫理を考える

Ⅱ 主題 Ⅱ

期 日

'86.11.14~16

▼講義・シンポジウム

I 生命倫理とエコ・テクノロジ
電気通信大学電気通信学部教授

合田周平氏

II 生命哲学の第三世代

「人間性」を再考する

青山学院大学経済学部教授 坂本百大氏

III 先端医療技術

東京大学医学部医用電子研究施設教授

古川俊之氏

IV 遺伝子操作

東京大学医学部教授 村松正実氏

他(7)、以上13校。

◇

生命関連諸科学の最近の急速な進歩と展開に伴って、生命倫理が緊迫した話題となつてきている。体外受精(試験管ベビー)、男女産み分け、臓器移植、遺伝子組み換え、人工臓器、機械診断など、近年のバイオテクノロジや医療技術の進展には目覚ましいものがある。現代の科学・技術が可能にした「生命」への直接的な介入は、将来の「人類の生存」に大きな貢献をなすものとして期待される一方、わ

(4)

命現象」の謎を次々と解き明かし、われわれは「生命や人間そのものに対する理解を、その深層において大きく転換せざるを得ない時期に直面している」(坂本氏)と言つても過言ではない。生命倫理の問題は、一般には先端的医療技術や生物工学の研究、開発、実施に対して、その「歯止め」を設定することと理解されているが、このセミナーでは、運営委員坂本氏の構想により、現代科学や技術の全体像の中から浮かび上がってくる生命観を核としながら、「生命とは何か」、「人間とは何か」、「それらは何故貴重なのか」といったより(根源的な問い)にまで踏み込みながら議論を重ねた。

◇

「今、生命倫理において実際に何が問題になってくるのか」。初めに、この問いに答えるために、初日と二日目の午前中にかけて、六人の講師がペア(合田・坂本、古川・村松、加藤・新美)を組み、各々の問題領域からの発題と参加者からの質疑応答を繰り返しながら、セミナーは進んだ。

合田氏は、特に現代社会における技術の新しい動向を紹介されながら、「技術と人間」の関わり方やこれからの倫理のあり方に注文をつけられた。「日本には、〈医は仁術〉という言葉がある。これは普通、医療で算術を使って稼いではいけないという意味にとられているが、孔子の言う仁とは、天地万物を創造し、生み育てる自然の力のことである。自然の中



医学の最前線に立つ村松正実氏(左)と古川俊之氏の講義をきく

V 生命倫理学の基礎
千葉大学文学部教授 加藤尚武氏
VI 自己決定権の尊重と生命倫理
明治大学法学部助教授 新美育文氏

▼運営委員

青山学院大学経済学部教授 坂本百大氏

▼参加者

37名
慶応義塾(5)、青山学院、東京理科、明治、早稲田(各3)、学習院、上智、明治学院、法政、筑波(各2)、東京女子、お茶の水女子、東京都立(各1)、その

れわれに医療そのものの意味をラディカルに問い直すことを迫り、また前例のない「新しい倫理的な問題」を突き付けている。

生命倫理が、「特にこの現代において衝撃的に現われて来ざるを得なかった」のは、われわれの伝統的な生命観や人間観が現代の科学・技術の挑戦によって、根本的な変革を迫られていることと不可分に結び付いている。特に、生命科学の飛躍的な発展がもたらした知見は、「生

に内在しているいろんな力を人間が技術として学んで、これを医療に用いよ、というのが〈医は仁術〉の本質である。……技術は、今必死になって文化との触れ合いを求めている。これからの倫理に求められているのは、ハイテクに支えられた文化を全面的に否定するのではなく、自然(エコロジ)の仕組みをテクノロジに導入し、それを展開してゆく際のシナリオやマニュアルをもっと積極的に作ってゆくことである(これに続いて行われた坂本氏の講義については、別掲「要旨」を参照のこと)。

夕食後の講義は「議論が宙に浮いてしまわないように」との配慮から、古川、村松両氏により、医学や医療の最前線の現場から、生命倫理へのアプローチが試みられた。

豊富なスライドを使用し、研究上、医療上での興味深いエピソードを交じえながら、臓器移植や人工臓器、医療資源の問題、また分子生物学の発展によって明らかになった遺伝子の構造と機能、その応用としての遺伝子工学の実際などが、

詳しく紹介、解説された。「医療の現場では医師の善意だけでは解決できない問題が数多くある」こと、「医師として人間の生死に関わることの大きな精神的な負担」、現代医療の現場に「実際に巻き込まれた人々の苦しみ大きさ」など、具体例が提示された。両氏とも、医療や医学の側は「今何ができ、これから何を

・講義II要旨

生命哲学の第三世代 ——「人間性」を再考する——



青山学院大学教授
坂本 百大

私は、生命倫理を考えるに際し、「倫理」とは一体何か、また、生命倫理において今どういう発想の転換がなされるべきかという二つの問題を基礎作業として提起してみたい。

カントのドイツ観念論に代表されるように、これまで倫理学は、唯一絶対的な価値を実現することが倫理的な行為だとしてきました。しかし、現代の道徳や価値観の相対化の結果、このような倫理観は崩壊してしまっており、生命倫理はそ

しょうとしているのかの情報をオープンに提供すべきである」と指摘され、情報の風通しをよくした上で、社会的なコンセンサスを得てゆく努力を重ねることの必要性を訴えられた。

生命倫理の先進国アメリカでは、すでに医療の場における「患者の権利」に関する社会的合意が成立している。新美氏からは、その中で特に中心的な位置を占めると言われる「患者の自己決定権」の概念とその問題性について指摘があった。

「現在のアメリカでは医学的に見て正しい判断で治療行為が行われたとしても患

うした倫理観の最先端にあるものと考えられます。私は、倫理をすぐれて社会的なものと思えてはいます。欲望が人間に等しく備わっているために、社会生活を営んでゆく上で様々な争い事が起こります。それらを調整してゆく技術として倫理ができたのではないかと考えています。私は、人間が苦痛を避けるために絶えず微調整してゆく技術のことを倫理工学と名付けていますが、現在の倫理学の課題は、理念を述べるのではなく、これから理念がどう変わってゆくかを予見することではないかと思っています。

それでは、今、生命倫理においてこの微調整を成功させるにはどのような発想の転換が必要でしょうか。生命の尊厳と言いつつ、われわれはすべての生命を尊重しているわけではありません。「人

者の同意を得なければ法的には *third party* になるという原則が確立されている。医師には、治療を始める前に患者に十分な情報を伝達し、理解させる義務があり、患者がその治療に同意 (*informed consent*) を与えるまで、治療してはならないことになっている。この自己決定権は、*voluntary* である (他から強制されていない) こと、*competent* である (自己判断ができるだけの能力がある) ことがその前提となっているが、何をもち

competent と決めるか、患者に判断力のない場合はどう扱うかなど極めて困難な問題をはらんでいる」(引き続き行

間だけが尊い」とするルネッサンス的なヒューマニズムは、人間にとつて有害なものをもつ殺すことにより、環境全体における人間の位置を見誤らせる結果を招きました。やや挑戦的な言い方をすれば、美しい博愛的なヒューマニズムを捨て、そのかわりに、人間は他の生物と同列に並ぶ生命の持ち主であるとする人間観に立った新しいタイプのヒューマニズムが、今、必要とされているのです。生命倫理では、特に「人間の尊厳」ということがよく言われますが、「人間の尊厳とは何か」についてはほとんど議論されていません。私は、現代文明を踏まえつつ、具体的な事例にぶつかりながら、「人間の尊厳」という言葉の意味を微調整的に考え直してゆかなければならないと思っています。

(文責：編集者)

れた加藤氏の講義については2・3ページを参照のこと。

◇ 二日目の午後には、「生命とテクノロジ」(古川、村松、合田氏)、「倫理をどう捉えるか」(新美、加藤、坂本氏)の二つのシンポジウムが配された。不治の遺伝病や癌などの告知の問題、医療に伴う社会的コストや有限な医療資源の配分問題、医用工学の意義などをめぐり、生命倫理の諸問題が多岐にわたって討論に付された。

「日本人は体外受精や男女産み分けに對しては非常に神経質だが、妊娠中絶には極めて鈍感だ。日本人の倫理観におけるこの不整合性や一貫性のなさをどう考えるか」(古川氏)、「日本で問題となった男女産み分けでは、学者の学問上の自由を制限したという意識はほとんどなく、また産み分けをやるのが母親の権利だ」という議論も皆無だった(加藤氏)。「日本ではお上から許しが出て初めて科学者が動き出す。アメリカでは積極的に新しいことをやってみて、不都合なことが起こりそうになると、お上より先に科学者の間で議論が行われる」(村松氏)。「アメリカでは問題が起こると、それをなすべく頭在化させてフランクに議論が行われる。日本の場合には『知らぬが仏』で、知らないが故にうまくいっている面がある」(新美氏)などの各氏の指摘は、欧米文化に根を張る生命倫理を日本に導入してゆく際の問題点を改めて浮彫りにす

ることになった。

生命倫理の提起している問題は、(「アポリア」のごとく、われわれに簡単な解答を許さない。それは、最終日の全体集会で、実際に医療の現場で看護に携わっている参加者の一人から、「援助しようとした手が汚れた手になるといった通常の悩みを超えた傷を看護者自身が受けなければならなくなっている」との発言にも端的に示されている。科学・技術と結び付いた現代医学は「今までは自然の運命に委ねられてきた選択を人間の道德的決断の場に置き換えてきている」(加藤

氏。科学の解明した「新しい生命像」と技術の切り拓いた「新たな可能性」は、かつては調和していた(「生存すること」)、「人道的であること」)、「倫理的であること」)の三つをバラバラに解体してしまった(坂本氏)。坂本氏が、やや挑発的に提起されたように、今やわれわれは、これまで自明とされてきた「人間の尊厳」のテーゼにまで遡って、「人間を再考する」必要に迫られているとさえ言えるのかも知れない。
われわれの手中にした現代の科学・技術は、人間存在の根幹である「生と死」

をその根本から揺るがし、今や(人間の同一性)を破壊するまでに至っている。すべての生命現象が「モノ」へと解体されて行く中で、生命倫理に課せられた究極の課題とは、結局は「人間の同一性を保証することである」(加藤氏)。「人間の新しい選択の可能性」が提起する生命倫理の諸問題は、医学、法律学、倫理学の専門家が直面するばかりでなく、「誰しもが直面するかも知れない倫理的な問い」である。生命倫理の問題は、「当事者になった人とそうでない人との苦しみ

が全然違う」(古川氏)ため、議論の際には、あくまでも自分自身の問題として受け止める能力が必要とされている。「一人一人の意見と信念が、この学問のこれからの中身を形づくってゆく」のである。生命倫理では、研究室と一般の市民を繋ぐ(情報のネットワーク)作りが、緊急の課題となっているという。トピックが極めて(先端的)であったために、テーマの持つ問題が、未だ広く一般に浸透していなかった点は否めないが、今回のセミナーがそうした両者を媒介する一つの先行的な「回路」となり得たとすれば幸いである。

参加者の感想から

知的空間に遊んだ三日間

看護の現場をはなれて

慶応義塾大学医学部附属厚生女子学院教師
矢田真美子

今回のテーマ「生命倫理を考える」は、医療の現場にいる者にとっては、さしせまった課題であり、時を得た企画に飛びつく思いで参加した。

私の場合は、私自身が看護婦であり、また看護学校の教師として仕事をしている立場上、「二重の意味の問題意識を持ってこのセミナーに臨んだ。ひとつは、臓器移植、脳死の問題、遺伝子操作、受精、出生の操作など、これまでの生命観、人間観を変えざるをえないような問題に直面する状況のなかで、自分自身が、一人の人間として、そして看護婦として、どのような考え方に基づいてこのような事態に対処していけばいいのか、ということ。もうひとつは、今後、医療の現場で、このような問題に直面し、自ら自分の行動、態度を決定することを迫られることになるであ

ろう看護学生に対して、何を、どう教えていけばいいのか、ということであった。

医学、遺伝子工学、倫理学、法律、システム工学、哲学のそれぞれの領域の最先端で活躍されている先生方のお話は、刺激的で楽しく、参加者からの率直な疑問や意見も飛びかい、ブレイン・ストーミングの醍醐味をたっぷり味わわせてもらった。

知的に活性化された三日間は、あつという間に過ぎ、嵐の吹きわたったあとに何が残ったかと問われると、まだ明確な構造にはなっていない。どこをどこを生命の始まりと考えるのか、どこを終わりと考えるのか? 人間の始まりいつから? 人間としての権利は人間のどの時期からどの時期まで保証されるのか? 誰の権利が優先されるのか? それぞれの主張の折り合いをどうでつづけるのか? このような問いに、これが唯一絶対の正しい答え、と決めるのが倫理であるとは思われない。倫理とは、人間がこれまで持ちあわせているレバトリでは容易に対応できないような社会的問題に対して、個々の人間の自由(たとえ仮構であっても)を尊重しながら、不確実ななかでも、エラーを予測し、エラーの少ない方向へ進路を修正し、折り合いをつけていく方法論といえるのではないだろうか。

か。紅葉の美しい自然のなかで、雑事にとらわれることなく、ひとつのテーマを中心に朝から夜遅くまで討議する、その知的空間に身を置き、その警沢を十分に堪能した。このような知的空間を、今回のように社会人にも是非もっと開放してほしい。それは、「大学を開く」の精神をさらに高めることになると思う。

友情のかけ橋

同じ問題意識を共有する

仲間の発見

上智大学大学院理工学研究科M1
赤津 晴子

思い返せば、生命倫理に自分が興味を持ちはじめたのは、特に学部時代、二年間学生会議のバイオエシックス分科会で二年間活動して以来、生命倫理は私にとって忘れられない存在となつてしまった。大学院で生物物理学を専攻する現在でもその気持ちに変わりはない。

今回のセミナーでは、文系・理系それぞれ三名ずつの先生方のご指導のもとで、哲学・経済・法律・物理・数学・生物学、様々な専攻の学生三〇名程が充実した三日間を共にし

た。先生方による講義はどれも非常に興味深く、また、それに引き続いた討議、シンポジウムも活気に満ちた、たいへん面白いものとなった。ただ今回のテーマが「遺伝学」でも「倫理学」でもなく、「生命倫理」であったことを敢えて強調すれば、これら多岐にわたって提示された視点を「生命倫理」というテーマのもとにどう結集させるかは各自に残された課題といえよう。

ところで「生命倫理」と聞くとすぐに「脳死」「体外受精」等を思い浮かべることが多い。そのような理解は誤りではないにしても、さか一方の面であるかも知れない。バイオエシックスという言葉をはじめ世に問うたポスター教授は、一九七一年の著書の中でバイオエシックスを「bridge between science and the humanities」と説明し、かつまた「それは人類生存という未来へのかけ橋——bridge over the time——であると述べている。三日間という限られたセミナーの時間で、壮大な未来へのかけ橋を完成させることは無理であろう。しかしその手はじめの第一歩として、このセミナーは、同じ問題意識を持つ参加者相互の間に貴重な友情のかけ橋をつくる場を与えてくれた。これを足場に、今後未来へのかけ橋を皆で構築して行きたいものである。

第23回 大学教員 懇談会

Ⅱ 主題 Ⅱ

大学教育の充実と個性化

臨教審第二次答申をめぐる

期 日

'86.10.4 ~ 5

▼ 発題講演

名古屋大学学長・臨教審第四部会長

飯島宗一氏

▼ パネル——学部における専門教育を考 える——

A 理工系学部教育の目標設定

東京工業大学名誉教授 慶伊富長氏

B 文科系の専門科目——学部か大学
院か、専門か学際か——

筑波大学哲学・思想系教授

井門富二夫氏

▼ 参加者 57名27校

(講師・運営委員を含む)

東京工業・電気通信・中央(各4)、国

際基督教・東京理科・法政・明治(各

3)、筑波・千葉・東京学芸・お茶の水

女子・一橋・青山学院・大妻女子・東京

経済・東京女子・日本・早稲田(各2)、

横浜国立・名古屋・京都・慶応義塾・芝

浦工業・上智・日本女子・武蔵工業・立

川短期(各1)、文部省・文化庁(各1)、

その他(2)。

の現状に対する厳しい評価を下す一方
で、専門教育の質の改善を「大学改革の
重要な焦点」として位置付けている。今
回の懇談会では、この答申を踏まえて「学
部における専門教育はいかにあるべき
か」を中心に議論した。

臨教審第四部からは会長の飯島宗一
氏、大学からは慶伊富長・井門富二夫・
伊東光晴の三氏、文部省からは大崎仁・
佐藤禎一の両氏にご参画いただき、臨教
審と大学と文部省の三者が熱心に意見交
換する格好の機会となった。ご発題いた
だいた六氏、および参集された各大学の
教職員の方々に對してここに改めて感謝
の意を表したい。

冒頭、臨教審がめざしている大学改革
の概略について飯島氏が発題講演を行っ
た。従来の政府の審議会のスタイルとは
違い、「作業委員会的な色彩」を強く持ち、
各方面からのヒヤリングを通して審議を
進めている。臨教審としては、あくまで
も諸提案が教育の現場で何らかの形で動
いていくこと、しかも最終的には「現場
の自発性」によってそれらが具体化され
ることを期待している、と部会長として
の真意を披瀝された。

さらに、氏は大学の戦後史を振り返り
ながら、問題の所在を明らかにする。新
制大学への移行に際して、学部教育のあ
り方が再検討されるべきであったが、「旧
制大学における少数者を相手にしていた
専門教育観が再点検されないまま、個々
の教員のレベルでなし崩しに整理され

た。

戦前の高等教育は旧制高等学校三年、
旧制大学三年の合計六年間であったが新制
大学になって実質的には二年短縮され四
年間になった。しかも、アメリカの制度
から導入された一般教育は、人的にも内
容的にも旧制高等学校ないし、予科的な
教育に對応するものとして持ち込まれ、
かつては三年間で教えていた専門教育を
二年間に圧縮して教えるをえなくなっ
たところに、戦後の学部教育の根本的な
問題点がある。それでも、戦前の旧制度
下における高等教育の規模が維持されて
いた頃までは、さして問題にならなかつ
たが、一九五〇年代の半ば以降、「大学
の大衆化」が進むなかで学部教育のあり
方が問われはじめるようになった。

それでは、「大学の大衆化」のなかで学
部教育の専門性はいかにあるべきか。今
日「専門」といっても「比較的安定して
いてライフスパンの長い領域」もあれば
「インターディシプリナリーな問題が絶
えず提起されてくる領域」もあり、これ
までのような「古典的意味での専門教育」
という捉え方では不十分であろう。これ
からの学部教育は一般教育とか専門教育
とかということではなくて、各大学がそ
れぞれの教育目標に従って「新しい意味
での一般的教育」を追求していくことが
必要だろう。

つづくパネルでは、人文・社会・理工
各分野から「学部における専門教育のあ
り方」を中心に大学人の改革に対する見

▼ C 専門教育のあり方をめぐって

経済学部を中心に——

京都大学経済学部教授 伊東光晴氏

(オブザーバー)

文化庁長官 大崎 仁氏

文部省大学課長 佐藤禎一氏

▼ 運営委員

上智大学外国語学部教授 蠟山道雄氏

中央大学経済学部教授 岩波一寛氏

東京理科大学理学部教授 石川孝夫氏

青山学院大学国際政治経済学部教授
杉山 恭氏



一昨年、発足した臨時教育審議会(以

下「臨教審」と略記)は21世紀に向けて

の教育のあり方を審議してきているが、

'86年4月には「第二次答申」を発表し、

国民的な教育論議を呼び起こしている。

なかでも第四部会では大学改革へ向けて

の幾つかの施策が具体的にしかも詳細に

掲げられている。

答申では「新しい境界領域や、学際分

野が絶えず形成され、発展しつつあるな

かで、偏狭な専門意識、人為的専門間の
隔壁を排除しなければならない」と大学

解が三氏によって提示された。まず慶伊氏は工学部教育の実状を懸念する。「優秀な工業製品を作りだし、売り込んでいく日本の技術者は天狗になっている」が、内側から見ると、「いまや寒心に堪えない」。「実験をしなくても、卒業論文を提出しなくても学士として卒業できる」というのが現状なのだから。一見、問題がないかのように言われている理工学部においてさえ「学部教育の教育目標」をはっきりさせることが大事だ。

井門氏は日本の学部教育には「カリキュラム」という考え方が欠落していると批判する。欧米ではファカルティ・オブ・アーツ・アンド・サイエンスとかファカルティ・オブ・フィロソフィーといわれている基礎学術分野と法・医・神学などの、より高度の応用学術とが明確に区別されているが、日本ではどう誤訳されたか「学部」がファカルティを意味しているのか、アンダーグラデュエイトないしグラデュエイト・スクールを意味しているのか、おおよそ曖昧である。経済学部や社会学部のように本来なら基礎学術領域の中で相互に関連してカリキュラムを組むべき分野がそれぞれ独自の学部を立ててしまい、相互に学問領域の壁を築いて横の繋りを断ち切ってしまったと指摘する。

伊東氏は、新制大学の理念が実現できなかった原因の一つは「語学教育に時間をかけすぎた」ことにあるとし、今後はインテンシブな語学教育によって教養課

程を一年半に短縮し、専門課程を二年半に拡大するとともに、半年毎の基本講座や複数の教師による競争講義を提唱された。要は制度の改革をまたずとも、現行制度のカリキュラムの内容を見直すことによって、学部教育を改善することはできるのであり、大学人自身による努力が必要だと直言された。

最終日の全体集会では、大崎仁氏の講演を挟みながら、昨夜行われた分科会の報告と討論が行われた。

その中で、文部省の大学行政に対する疑問や大学改革に取り組む姿勢について、とりわけ「大学、学部・学科の新設の審査について」、「教員採用の基準」などの規制緩和に対する意見や「大学審議会」についての質問が出された。

それに対して文部省は「臨教審と文部省のあいだには齟齬はない」（大崎仁氏）し、「答申には制度論だけでなく、方法や内容までいくつかの提言がなされていることは注目に価する」（佐藤氏）と評価するなかで、「大学制度を弾力化する方向でお手伝いする」ことが基本的な立場であるという。さらに、「大学審議会」の設立については第二次答申の直後に「大学改革に関する研究協議会」を発足させ、構想の具体化を検討しているが、大学をトータルに見直す機関として「権威あるもの」にしていきたい、と大崎氏は語る。

学部教育における専門教育は、大学教育全体のなかで再検討されるべきだが、

大学教員懇談会 雑感

大学教員にも研修の機会を

千葉大学教養部助教授 坂井昭宏

今秋、ふたたび、大学教員懇談会に参加する機会に恵まれた。飯島先生のお話でとくに興味深く拝聴したのは、第四部会長を引き受けられる際の心境や、おそらくは進歩的あるいは左翼的な立場に立つ方々との議論、臨教審内部での先生の御立場などについてである。こういうと野次馬的好奇心の強い奴だと思われかもしれないが、そうではなくて、大学人として長い研究と教育の経験を持たれる先生の大学のあるべき姿に対する強固な信念と、国家の一大事に向かわれる決意と覚悟とをそうしてお話から、十分に知ることができたということである。

とくに敬服したのは、理念や理想の追求ばかりでなく、それを実現する手段や過程にも大学には大学としての途があるという点である。先生はあくまでも各大学各学部の自主的かつ創造的な改革を期待されているのである。民間の企業はいうまでもなく、各種公務員には定期的な研修が義務づけられているという。しかし、大学教員にはそうした機会は与えられていない。大学セミナー・ハウスの主催するこの会は、そうした意味で非常に貴重であると思う。

大学教員相互の信頼と努力で

問題の解決を

電気通信大学電気通信学部助教授 中平靖弘

総合大学の学部から工科系単科大学の一般教育に移って、私が最も強く感じたことは一般教育での研究環境の厳しさで一般教育と専門学部との壁また格差でありました。以前は「教育研究」と「研究」に分離してこの面々の両立が求められていたことに気がきました。専門課程で限られてきた者には多人数の学生を相手にすることに多くの戸惑いを感じます。ここで、自分の満足するような教育が必要です。その結果、名に値する研究や学会活動は極めて困難となります。研究活動を離れて先端的な化学の理解に努力しつつそれを生かして活気に溢れる充実した講義を続けることは至難であります。一般教育教官の研究環境を充実させることは教育的側面から見て、とくに軽視されがちな基礎的学術研究の振興からも極めて重要であろうと思われまます。

ここには教官相互の信頼で解決可能な問題が多く含まれています。「大学内の教官の努力と信頼で解決可能なことは、大学で解決する一番難しい問題である」という言が打ち破られることを信じつつ悪戦苦闘しております。このような困難な問題を共通に持つ大学人と意見を交換できる場が持てればと考える昨今です。

るにもかかわらず、硬直的で、画一的であるとの批判が強い。大学改革は、今や教育界全体の改革の問題と密着しており、その方向と成否が注視されているといえよう。

なお詳細は、企画室編集の『第23回大学教員懇談会記録』（三月末刊行予定）をご覧ください。

第13回 国際学生 セミナー

「開かれた」日本・総点検

「開かれた」とは何か

Ⅱ 主題 Ⅱ

▼ゲスト講演

いまマスコミの最前線から

「日本の新聞は「開かれている」か」
毎日新聞社編集委員 古森義久氏

▼セクション演習

A 国民国家の行方―世界の中の日本―
早稲田大学社会科学部教授 大島英樹氏

国際基督教大学教養学部準教授
マリオン・ステイール氏

B 開放経済体制のコスト・ベネフィット
学習院大学経済学部教授 鳥野卓爾氏

サービスカンパニー炉心管理部
小高章子氏

▼運営委員

東京外国語大学外国語学部教授

宇佐美滋氏
(委員長)

上智大学理工学部教授 庄野克房氏

国際基督教大学教養学部準教授
マリオン・ステイール氏

筑波大学歴史・人類学系助教授
小野沢正喜氏

ユニセフ駐日代表部副代表
溝田勉氏

期 日
'86.10.24~26

オーストラリア国立大学豪日研究センター研究員 コリン・マッケンジー氏

C 日本社会は異質性をどこまで受容できるか―帰国子女問題の文化的意味を考える―

福岡教育大学教育学部教授 江淵一公氏
国際基督教大学高校教諭 ラリー・ハケット氏

D 日米共同科学研究における文化人類学の問題点
マサチューセッツ工科大学準教授
シャロン・トラウイーク氏

ゼネラルエレクトロニクス・テクニカル

▼参加者 64名(内女子29名)

①国籍別(計6カ国)――日本(58)、タイ(2)、中国・フランス・スウェーデン・アメリカ(各1)。

②大学別(計22校)――独協(13)、東京(9)、日本女子(5)、早稲田(4)、筑波・東京外国語・学習院(各3)、横浜国立・一橋・立教・津田塾・国際基督教(各2)、東京経済・東京国際・日本

歯科・同志社・横浜市立・青山学院・慶応義塾・明治学院・国際・産業能率短(各1)、その他(4)。

◇

「日本は国際化時代を迎えた」と言われてからすでに久しい。しかし、一方で「国際化」が華々しく喧伝されているにもかかわらず、今日本は「世界中から改めて積極的な「開国」を迫られている」(宇佐美氏)。「意識開国」「国際国家」といった標語の下、「国際化」を推し進めてきたはずの日本に対し、外国からの開放要求は一向に衰えを見せず、その声は日増しに強まっているようにさえ見える。

これまで多くの人々がいろいろな角度から「国際化」について語ってきたが、その意味は意外に明確ではない。そもそも「国際化」や「開かれた」とは、一体どういうことなのだろうか。こうした疑問に解答を与えるべく、今回から新たに4回の新シリーズを迎える国際学生セミナーは、その共通テーマに「開かれた」日本・総点検」を選んだ。

日本の世界的プレゼンスが強大になつた今、経済だけでなく、政治、社会、文化などあらゆる面で、「日本人自身が無意識的に当然として」いることで、国際的に見ると、不当と見えることがある。20世紀末の世界は、各国とも思うように前途の展望が描けない時代にある」とも言われるが、そうであるからこそ、今「歴史を先取りするセンス」(鳥野氏)が必要とされている。われわれ自身の手で「打開のイニシアティブ」を取り、「国際的に見て通用しない」部分を総点検することを通して、「開かれた」社会のモデルを模索することが、今回のシリーズに課

せられた課題である。

◇

初日の共通セッションでは、大島、鳥野、マッケンジー、江淵、トラウイーク、小高の六氏から、自己紹介を兼ねて、政治学、経済学、文化人類学の三つの学問領域から問題提起がなされた。「望ましい世界イメージと日本イメージ」(大島氏)、「フリーではあるがオープンではない日本」(鳥野氏)、「異質性を極端に排除する日本社会の特質」(江淵氏)、「物理学者研究者集団における日米の文化差」(トラウイーク氏)など、三日間のセミナーの骨格を形作る視点が提供された。

特に、「日本の社会は自分で自分のことを切り拓くことをあまりしなくても暮らせる、大変恵まれた社会。しかし、この恵まれた社会をいつまでも続けることができる」(鳥野氏)こと、「日本の国際化を対外関係の中だけで考えてゆくのではなく、ホンネとタテマエの使い分け、ウチとソトを峻別するなど、日本人の日常の生き方の中にある問題から解決してゆく「内なる国際化」の視点」(江淵氏)の二つの指摘は、それぞれ今回のテーマにアプローチしてゆく際の「前提」と「方法」を参加者に提示することになった。

◇

二日目の午後の講演では、「開かれた日本を考えてゆく上での具体的な手掛かりを探るために、「日本の新聞の世界」が取り上げられた。ゲストには、ベトナム戦争でのサイゴン陥落前後の報道で

「日本は国際化時代を迎えた」と言われてからすでに久しい。しかし、一方で「国際化」が華々しく喧伝されているにもかかわらず、今日本は「世界中から改めて積極的な「開国」を迫られている」(宇佐美氏)。「意識開国」「国際国家」といった標語の下、「国際化」を推し進めてきたはずの日本に対し、外国からの開放要求は一向に衰えを見せず、その声は日増しに強まっているようにさえ見える。

これまで多くの人々がいろいろな角度から「国際化」について語ってきたが、その意味は意外に明確ではない。そもそも「国際化」や「開かれた」とは、一体どういうことなのだろうか。こうした疑問に解答を与えるべく、今回から新たに4回の新シリーズを迎える国際学生セミナーは、その共通テーマに「開かれた」日本・総点検」を選んだ。

日本の世界的プレゼンスが強大になつた今、経済だけでなく、政治、社会、文化などあらゆる面で、「日本人自身が無意識的に当然として」いることで、国際的に見ると、不当と見えることがある。20世紀末の世界は、各国とも思うように前途の展望が描けない時代にある」とも言われるが、そうであるからこそ、今「歴史を先取りするセンス」(鳥野氏)が必要とされている。われわれ自身の手で「打開のイニシアティブ」を取り、「国際的に見て通用しない」部分を総点検することを通して、「開かれた」社会のモデルを模索することが、今回のシリーズに課

せられた課題である。

◇

初日の共通セッションでは、大島、鳥野、マッケンジー、江淵、トラウイーク、小高の六氏から、自己紹介を兼ねて、政治学、経済学、文化人類学の三つの学問領域から問題提起がなされた。「望ましい世界イメージと日本イメージ」(大島氏)、「フリーではあるがオープンではない日本」(鳥野氏)、「異質性を極端に排除する日本社会の特質」(江淵氏)、「物理学者研究者集団における日米の文化差」(トラウイーク氏)など、三日間のセミナーの骨格を形作る視点が提供された。

特に、「日本の社会は自分で自分のことを切り拓くことをあまりしなくても暮らせる、大変恵まれた社会。しかし、この恵まれた社会をいつまでも続けることができる」(鳥野氏)こと、「日本の国際化を対外関係の中だけで考えてゆくのではなく、ホンネとタテマエの使い分け、ウチとソトを峻別するなど、日本人の日常の生き方の中にある問題から解決してゆく「内なる国際化」の視点」(江淵氏)の二つの指摘は、それぞれ今回のテーマにアプローチしてゆく際の「前提」と「方法」を参加者に提示することになった。

◇

二日目の午後の講演では、「開かれた日本を考えてゆく上での具体的な手掛かりを探るために、「日本の新聞の世界」が取り上げられた。ゲストには、ベトナム戦争でのサイゴン陥落前後の報道で

「日本は国際化時代を迎えた」と言われてからすでに久しい。しかし、一方で「国際化」が華々しく喧伝されているにもかかわらず、今日本は「世界中から改めて積極的な「開国」を迫られている」(宇佐美氏)。「意識開国」「国際国家」といった標語の下、「国際化」を推し進めてきたはずの日本に対し、外国からの開放要求は一向に衰えを見せず、その声は日増しに強まっているようにさえ見える。

「ボーン国際記者賞」を受賞され、現在も第一線で活躍中の毎日新聞社編集委員・古森義久氏をお迎えした。

「日本の新聞は果たして（開かれてい
る」のか」との自問から開始された講演
の中で、氏は「日本の新聞の中で閉鎖的
と思われる部分」に特に焦点を絞り、①
日本の新聞の構造上の問題としては、発
行部数が多く、（大衆）を相手とするため、
八方美人的な事なかれ主義に陥っている
こと、朝と夕二回の発行のため、記者が
「ゆっくりと考えて、底の深い記事を書
く」ゆとりがないこと、②日本独特の排
他性の強い記者クラブ制度の存在、③「東
側陣営に甘く、西側陣営に辛い」特異体

〈開かれた〉社会のイメージを模索する——各セクションの問題提起
左から小高、トラウウィーク、江淵、宇佐美、島野、マッケンジー、大島の諸氏。

質、④過去の検証をあまりしないこと、
⑤組織的に圧力をかけてくる団体に弱い
ことなど、「内側から見た反省」を披瀝
された。氏は、最後に「今、新聞が面白
い」と話を結ばれ、「新聞が他のマス・
メディアによって大きく変質を迫られて
おり、同じ問題を取り上げるとしてもか
なり多様になっている」事実を指摘され
た。ジャーナリズムの現場からのご自身
の体験に基づいた話に対し、参加者から
は「報道に対する新しい視点が生まれ
た」、「これからは記事の背後を覗くとい
う意識を持ちながら新聞に接してみたい
」との感想が寄せられた。

◇

引き続き開催されたシンポジウムで
は、初めに、初日の夜と午前中に行われ
た四つのセクション別演習の中間報告が
なされた後、活発な討論が繰り広げられ
た。古森氏の講演に対しては、フロアー
から、「この間の韓国の学生運動の記事
を見て愕然とした。隣の韓国からの情報
でさえ、U P電で、朝日、毎日、日経の
三紙が全部同じであった。アジアのもの
でもアメリカ経由の情報しか伝わらない
とすれば、日本としての情報網を確立し
てゆく必要があるのではないか」との質
問が出され、また江淵氏からも、日米の
新聞の違いの一つとして「アメリカの新
聞だと中南米の記事が比較的多く出る。
日本の新聞には、アジア関係の記事は非
常に少ないという印象がある。日本の国
際化を論ずる上で、アジアと日本人の関

わり方をもっと積極化してゆかないとど
うにもならない」との指摘があり、実例
を通して、現代日本が依然明治以来の「脱
亜入欧」的発想から自由になりきれてい
ないことが改めて自覚化された。また、
大島氏からは、「国家が一旦牙を剥いた
時の恐ろしさを経験している」世代とし
て、「国家を飛び越えて、直接世界と結
び付いているのが最近の若い人の特徴」
との問題提起がなされ、「自分が日本人
であるというところを感じる時が少ないの
が、逆に日本の国家としての特質だと思
う」との分析も示された。

◇

日本では、「国際」は美化されがちな
言葉である。三日目の自由討論のセッ
ションでは、「安易な国際化」イメージ
を打ち破るため、2時間半にわたって
突っ込んだ議論が行われた。各セクショ
ンのレポーターからは、「国際的思考と
国内的思考の差」、「ピントのずれた途上
国への経済援助」、「一つのものを（外）
から見る見方と（内）から見る見方の大
切さ」などが指摘され、「身近なことに
眼を向けながら、グローバルに考え、そ
の両者を両立させてゆく」ことの重要性
が確認された。

このセミナーでは、副題に「開かれた」
とは何か」を掲げ、なるべくわれわれの
身の周りにある具体的な事例に則しなが
ら、〈開かれた〉社会像作りのステップ
とした。日本が現在、各国から槍玉にあ
げられ、このままでは「世界の孤児にな

りかねない」との危惧が表明されている
背景には、奇跡とも言える発展を成し遂
げた「経済大国としての存在」があるこ
とは否定できない。しかし、同時に、世
界が日本を注視しているのはその優秀な
工業製品の背後に潜んでいる「ジャバ
ニーズ・マインド」（マッケンジー氏）
の問題である。最終日の全体集會を総括
して、ある参加者が三日間の討論を「ア
イデンティティ・クライシス」と「共同
体への帰属意識」の二つの用語に集約し
てみせた。確かに、〈開かれた〉日本を
模索してゆくためには、好むと好まざる
とにかかわらず、日本自身が「変容」を
迫られているという自覚が不可欠であろ
う。日本人は、今、自分たちとは「異質
なもの」との出会いと関わりを通して、
自らの（ナショナルな）アイデンティティ
を揺さぶられつつある。「今日、日本は
史上未曾有の急激な国際化過程の渦中に
ある」（江淵氏）とするならば、それは
また異なる地域で人類が発展させてきた
多様な文化との交流を通じ、「問題解決
のために人類が持っている手法のレパ
トリリーの広さ」（トラウウィーク氏）を認
識し、学び取ってゆく絶好のチャンスと
もなり得る。

最後になるが、このセミナーの実現の
ためにご協力いただいた各講師、また企
画から運営の全般にわたる労を取られた
宇佐美氏をはじめとする運営委員各氏
に、厚く感謝の意を記しておきたい。

法人ニュース

国際館建設のための 開館20周年記念募金第2回報告

(86年10月31日現在)

申込総額 四、〇〇〇万七、〇〇〇円
(内入金済 三、四二二万七、〇〇〇円)
内訳

財界関係 一八件 三、五一五万円
大学 一三件 七三万円
一般 一二件 三五万円
個人 二一九件 三七七万七、〇〇〇円

・寄付申込者(芳名(申込順))

◎財界関係

株式会社イトーヨーカ堂殿
社団法人信託協会殿
社団法人全国相互銀行協会殿
社団法人全国地方銀行協会殿
社団法人全国地方銀行協会殿

◎大学

職業訓練大学校殿
産業能率短期大学殿
日本女子大学附属高等学校殿

◎一般

三〇、〇〇〇円 愛知株式会社殿
二〇、〇〇〇円
三〇、〇〇〇円 株式会社エム・エス計算センター殿
三〇、〇〇〇円 三多摩燃料株式会社殿
五〇、〇〇〇円 有限会社伊藤新建設殿
二〇、〇〇〇円 株式会社河内工房殿

◎個人

五〇、〇〇〇円 東京電力株式会社東電学園
一〇、〇〇〇円 東京学芸大学名誉教授
三橋文雄殿

五、〇〇〇円 元関西地区大学セミナー・
ハウスマニエール、大阪大学名
誉教授 赤堀四郎殿
二〇、〇〇〇円 早稲田大学教授
戸沼幸市殿
五、〇〇〇円 日本生産性本部
榎井清彦殿

一〇、〇〇〇円 学習院大学教授
江沢 洋殿
五、〇〇〇円 お茶の水女子大学名誉教
授 松元文子殿
五、〇〇〇円 中央大学教授 伊藤成彦殿
五、〇〇〇円 フレンズ児童セクター
総主事 桐生富久殿
五、〇〇〇円 成蹊大学教授
佐々木克己殿

三〇、〇〇〇円 株柴田印刷所社長
柴田 勇造殿
二〇、〇〇〇円 神奈川大学教授
野沢 浩殿
五、〇〇〇円 明星大学教授
川田 雄一殿
一〇、〇〇〇円 元日本女子大学教材課長
合田信子殿
一〇、〇〇〇円 東京都立大学名誉教授
五唐 勝殿
一〇、〇〇〇円 明治学院大学教授
三和 治殿
五、〇〇〇円 日本大学名誉教授
小田切松義殿
一五、〇〇〇円 東京大学名誉教授
小谷 正雄殿
五、〇〇〇円 慶応義塾大学教授
石川 明殿
五、〇〇〇円 元法政大一高教員
福島 明殿
三〇、〇〇〇円 東京理科大学教授
狩野紀昭殿

一〇、〇〇〇円 東京理科大学教授
梅沢文輔殿
二〇、〇〇〇円 学習院大学教授
黒田成俊殿

一〇、〇〇〇円 大妻女子大学学生部長
緒方真也殿
五、〇〇〇円 明治大学教授 柴田政利殿
一〇、〇〇〇円 立教大学教授 鶴川 馨殿
五、〇〇〇円 法政大学教授 三浦徳弘殿
二五、〇〇〇円 津田塾大学学長
大東百合子殿
二〇、〇〇〇円 慶応義塾大学教授
森岡敬一郎殿

一〇、〇〇〇円 白梅学園短期大学学長
田中未栄殿
五、〇〇〇円 楽善堂印鋪 平沢友則殿
二〇、〇〇〇円 順天堂大学教授
榎林博太郎殿
一〇、〇〇〇円 成蹊大学教授 広野良吉殿
五、〇〇〇円 国際基督教大学教授
原一雄殿
五、〇〇〇円 埼玉大学助教授
長谷川三千子殿
五、〇〇〇円 専修大学教授 安藤賢一殿
五、〇〇〇円 長岡技術科学大学教授
富川松男殿
一〇、〇〇〇円 東洋大学教授 北村嘉行殿
五、〇〇〇円 国際基督教大学教授
三七 彰殿
五、〇〇〇円 産業能率大学学長
松田武彦殿

一〇、〇〇〇円 文化工房 山之内藤野殿
五、〇〇〇円 松下政経塾 本間正人殿
一〇、〇〇〇円 青山学院大学教授
手塚喬介殿
一〇、〇〇〇円 文部省顧問 天城 勲殿
一〇、〇〇〇円 立正大学教授 中村孝之殿
五、〇〇〇円 江洲学院院長 江洲浩美殿
五、〇〇〇円 東京国立博物館館長
村山松雄殿
一〇、〇〇〇円 東京大学助教授
海老根宏殿
一〇、〇〇〇円 松島商店 松島幸作殿

昭和61年度協力会員校事務連絡会

東京都立医療技術短期大学
文教大学女子短期大学部を
新たに迎えて

'86年9月18日10時半〜17時

当ハウスが会員校との連帯を深め、法人運営の円滑化を図るとともに、会員校相互の親睦・交流を目的としている事務連絡会は、学生課・教務課の事務担当者25校33名の出席を得て開催された。前年度は開館20周年に当り記念行事の多い年であったため見送られていたので、今回は二年ぶり、通算17回目であるが、本年度に準協力会員校(短期大学・高等専門学校)に加入された東京都立医療技術短期大学、文教大学女子短期大学の歓迎会をかねての開催である。

プログラムは中川理事長の挨拶で開会、立野専務理事から当法人の事業についての概況説明がなされたあと、キャンパスを見学、午後は中央大学学生部事務

(12ページ三回目につづく)

千人会

'86年9月~11月

◇現在会員一、五二六名(実会員数)

(通算入会者一七八一名)

◇新しく会員となられた方々

1名(第85回報告(申込順))

C 長岡技術科学大学学生課 泉 敏彦殿

◇会費ありがとうございました

- 小田切松義、大塚博、押田勇雄、沖塩莊一郎、
- 楳林博太郎、鈴木喬、古屋野正伍、島岡丘
- 川島須美子、長内了、藤永光文、小林祐子、
- 朽津耕三、森口繁一、井深淑子、小川智哉、
- 田端光美、滝口亨、小林弘、高村多賀子、三
- 村卓雄、大沢綱一郎、石村善助、島袋嘉昌、
- 奥田真文、岡村甫、木村宗男、小堀桂一郎、
- 若崎不二子、尾形典男、滝幸三郎、武藤英輔、
- 林勲、千葉正士、森田明、長松昭男、井手入
- 登、後藤米夫、小和田恒、増田茂樹、谷俊治、
- 宮坂宏、鈴木忠義、朝倉孝吉、大東百合子、長
- 尾形憲、鈴木守、加藤五六、松田徳一郎、長
- 津一郎、小田切美、伊能敬、石橋秀雄、鞍
- 馬菊枝、河野恵、青柳清孝、永井克孝、鳥居
- 照男、田中弥寿雄、釜范善一、高橋泰蔵、関
- 本昌秀、岡野澄、森田桐郎、町野朔、木村富
- 夫、末松安晴、神山妙子、堀口幸一、井門富
- 二夫、坂本義和、平澤興、加藤一郎、今井淳、
- 林明夫、岡茂男、安達義明、日高精二、矢吹
- 晋、田村康男、久場鳩子、塩見利夫、平野敬
- 一、末岡俊二、稲垣寛、沖中重雄、松田千鶴
- 子、船山信子、前川真理、藤田淑子、笠井伍
- 朗、川原栄峰、安達健、池上秋彦、鈴木成文、
- 大竹誠、小田中敏男、布川角左衛門、鳥居泰
- 彦、平澤茂一、小川芳男、神戸愉樹美、東寿
- 太郎、久武雅夫、矢内喜久子、佐藤健生、田
- 村献、江尻美穂子、安嶋彌、神田信夫、堀光
- 男、飯田経夫、森岡清美、新田悟、松田稔子、
- 森井眞、大貫一、酢屋善元、伏見弘、関口利
- 男、高橋三郎、鬼塚宏太郎、大坪秀一、石川
- 正一、荒川幾男、秋田成就、佐々木克己、小
- 川捷之、宇都栄子、坂野親司、戸田盛和、宮
- 野彬、小田滋、清水護、佐原六郎、堀信一、

◇千人会員からのたより◇

昨年四月、東京都立大学から現在の大学に
 変りました。大学附属のセミナー・ハウスを
 使用することが多くなりましたが、長年利用
 して来た柚木のハウスをなつかしく思ってい
 ます。そのうち機会があったらと思っています。
 専修大学教授 石村善助

◇

初めて千人会費を納入させていただきました
 す。今後共どうぞよろしくお願ひ申し上げます。
 拓殖大学専任講師 佐藤健生

◇

長いことセミナー・ハウスへ参りませんの
 で、そのうちとを考えております。
 専修大学助教 宇都栄子

◇

本年一〇月も学生と共に卒業準備、合宿を予
 定していましたが、今年に限りハウスに行け
 ず残念です。
 東洋大学教授 飯島宗享

◇

暫くご無沙汰しておりますが、誕生日のお
 祝いのカード嬉しく拝受しました。ことしも
 元気で、セミナーO.B等百人程が集まっ
 て、この日を楽しませていただきます。
 早稲田大学教授 鶴岡義一

九月下旬から暫く病気をしましたので、今
 年の誕生日はより一層の感謝の気持ちで迎えま

◇教育プログラム資金
 一〇、〇〇〇円 第13回国際学生セミナー参

寄付金

'86年9月~11月

▲植樹資金▼

- 五、〇〇〇円 全国友の会
- 南関東部会記念殿

▲一般寄付金▼

- 一〇、〇〇〇円 東京女子短期大学殿
- 五、〇〇〇円 嘉悦女子短期大学
- 五、〇〇〇円 嘉悦女子短期大学
- 五、〇〇〇円 小林サト殿
- 五、〇〇〇円 おさひめ幼稚園殿
- 五、〇〇〇円 八王子たのしい授業
- 四、〇〇〇円 日野協力会殿
- 三、〇〇〇円 嘉悦女子短期大学
- 三、〇〇〇円 茶道同好会殿
- 五、〇〇〇円 研究会殿

長・新谷麗造氏を座長に、産業能率短期
 大学教務部長・松元淳氏を副座長に推
 し、協議会がもたれた。出席者から出さ
 れた発言の中から、いくつかを紹介し
 ておきたい。各大学の合宿施設が充実し
 てきている昨今、これらの意見や注目を
 踏まえて当ハウスの独自性を発揮しつ
 つ、可能なところから諸施設の改善・整
 備に取り組んでいかなければならない。
 ハウスの存在を知らない先生が多い。
 PRの方法に一考を要する。
 主催プログラムに学生がもっと興味を
 示すようにポスター掲示以外の工夫が
 必要。

。身体障害者のための配慮。
 。コンパ(アルコール)の条件付緩和。
 。学生の利用に対する大学側の補助
 ——利用券の発行等を各大学の共通
 課題として検討してはどうか。

【出席者】(国公私別・入会順・敬称略)

- 東京II小川誠、東京工業II三好清勝、東京
- 学芸II古賀洋弘、東京農工II福島毅、東
- 京外語II深井敏、筑波II神矢良和、埼
- 玉II篠崎徳治、早稲田II中山弘、慶応義
- 塾II大堀洋、明治II小林哲夫、須田和企、
- 中央II新谷麗造、竹永紋子、小笠原厚子、
- 武蔵II山田勝、明治学院II森川絃一、
- 成蹊II佐々木勝洋、順天堂II内村暁、国
- 際基督教II鈴木幸夫、武蔵II岩本喜代子、
- 小松正樹、学習院II河野文里、芝浦工業
- II菊地厚、東京農業II松丸禎二、杏林II
- 牧野勝利、淑徳II菅谷厚子、舟田顕、産
- 業能率短期II松元淳、伊藤卓郎、木下淳子、
- 東京工業高専II長嶋謙一、都立医療技術
- 短期II中村充元、内田律

放送大学 磯部浩一

◇

永年会員となっておりますが、まだ一回も
 厄介になったことがありませんので、来年五
 月頃でも一度参りたいと思います。
 元東京学芸大学教授 山口貞雄

◇

「年報」有難うございます。うっかり送金
 失念致しました。玉川大学教授 満尾寿男

業／務／通／信

86年9・10・11月

秋の多彩な合宿研修から

夏休み終盤の合宿が集中する9月で、年度前半が終わる。宿舎の稼働率は、4月から9月まで連続して六〇%を上回った（これは初めての記録である）。10・11月にはこの丘の秋色が大変美しい時節だが、利用状況はおおむね週末・祝祭日周辺に集中して、ウィークデーは閑散気味。例年のことだが、稼働率は五〇%を割る。しかしこの三ヵ月、いわゆるゼミ合宿（別掲「利用状況」参照）に加え、今年も「学内交流」、「大学間交流」そして「国際交流」の諸集會が行われ、それぞれ特色のあるプログラムを展開した。中でも日本研究の米国人学生一名が、9月から12月にかけて国際セミナー館等



お月見交歓会でお国の歌を披露する米国人学生たち。下欄の写真と記事を参照。

に計七五泊したことが特筆される。勿論、開館以来の超長期セミナーである。

●法大技術連盟GLCは20年目

夏休み終了前後を利用しての各大学の合宿が集中するので、9月のグループ数は一三三を数えた。長年の常連が多いが、中でも法大技術連盟のGLC（グループ・リーグ・ス・キャンプ）は67年以來連続の開催。今年で二〇年目である。当初よりこのGLCを見守ってこられたのが横山勝信教授で、今回も技術関係一研究會のリーダー二二〇名と二泊三日を共にされた。

他に「学内交流」には、次のような合宿が挙げられる。立大文学部が主催する恒例（一四年目）の「集中合同講義A」。今年も「集中合同講義C」がはじめてハウスで合宿を行った。また、ハウスの共同セミナーにヒントを得て発足して一年目になる芝浦工大建築学科「八王子ゼミ」。他に英語だけで一週間をすごす津田塾大「学内ITC」（感想文を別掲）、東京理科大「建築計画ゼミ」などがある。なお、10月の開催では、二二年目の順天堂大「病院業務改善セミナー」も、「学内交流」で成果を上げてきたセミナーである。

●社会学合同セミナーは「自立」して四年目

「大学間交流」の集會は、やはりハウスの特色である。ハウス主催の大学共同

津田塾大学学内ITC

Time passed like an arrow. A week's ITC (Intensive Training Course) at the Seminar House seemed extremely short for me, because it was much more full of fun than I had expected. The teachers were very friendly and I could talk with them in the way that I could not do at college. Freshmen, sophomores and juniors—we were all together in one class studying and playing. Also, the ITC gave me a chance to experience what I cannot at school. We talked with a group of American students who were staying at the House. On September 18, we enjoyed the "Harvest Moon" (O-tsuki-mi) with them at supper time (exchanging each other's songs, etc.). So, why don't you join the ITC next year!

Ayumi Kudo
3rd year, English Dept.



英語で「お月見」を説明する工藤さん(左)。

セミナー、国際学生セミナー、大学教員懇談会（いずれも実施報告を別掲）をはじめ、自主ゼミとして独立して四年目、通算で七回目の社会学合同セミナーが開催された。この合同セミナーは「現代社会における人間の在り方」をテーマに、三大学（慶応、法政、専修）の五ゼミから一〇八名が参加した。学生の準備委員を中心とする自主運営はすでに定評があるが、今回は全体集會に分科会での討議をより有効に反映させるために「分科会報告者会議」を設けるなど、積極的な試みが増えられた。

●五つの訪日研修団・国際集會

この三ヵ月にハウスが迎えた訪日研修グループや国際集會は、①米国大学「日本の経済・経営研究セミナー」秋期プロ

グラム（国際教育交換協議會）、②海外日本語講師研修會（国際交流基金）、③日豪学生交流（東京工業高等専門学校）、④シンポジウム「パーキスタイン」（日本パキスタン協會）、⑤エスベラント国際セミナー（エスベラントの家）の五つである。

●英国人青年、自己発見の旅で八三泊——個人利用の最長記録

生化学を志すステフェン・オーウェン君という英国人の若者が、9月中旬単身で来館。オックスフォード大入学前の一年間を海外で遊学中とのこと、ハウスを宿に東京農工大学の研究室へ「通学」した。

●初のセミナー・プログラム
日本研究で米国の学生11名が75泊

日本の経済・経営について学ぼうとする機運が諸外国で高まる中で、国際教育交換協議会(CIEE/米国に本部を置く世界的な大学連合体)は、米国の大学生・大学院生を対象に、ここ数年毎夏二カ月のセミナーを主催してきた。当ハウスでも過去三回このセミナーを迎えているが、この秋にはCIEEが初めて試みた四カ月のセミナー(学期)プログラムが実施された。経営・経済・社会学の講義、日本語演習(延べ206時間)、企業訪問等には所属各大学から単位が認定される。

参加者はノースカロライナ、コロンビア、ラトガースなど10校からの11名(うち女子4名)。9月初旬から四ヵ月(うち三週間は都内で家庭滞在)にわたる75泊は、ハウスにとっても開館以来初めての経験であった。この間、ハウスの職員の間で食堂や交友館での交歓(その結果、たとえば法大石谷ゼミは多摩校舎に彼らを招待した)、遠来荘での茶会、禅寺での坐禅、八王子いちよう祭りへの参加などの「課外活動」を楽しんだ。退館時には互いに名残りを惜しみ、この超長期合宿の無事終了を心から喜んだ。

下欄は、ハウスが用意した五つの質問に対する彼らの異文化体験の「総括」である。その一部をここに紹介したい。

アメリカ人学生の見た日本

COOPERATIVE JAPANESE BUSINESS AND SOCIETY PROGRAM — CIEE

I. What feature of Japanese society, culture, or business impressed you the most? What did you find most strange?

- * I was most impressed by the way people in Japan work together to get results. Before I came, I thought the talk about the group orientation of the Japanese was overblown, but it's not. People here do look out for one another and care for each other very much. I was most surprised by the way people in Japan go all out for their hobbies such as having the best equipment, clothes, etc. (S. R.)
- * I particularly admire the Japanese work ethic. It still remains a mystery to me of what exists in Japanese culture that doesn't exist in that of the US which motivates Japanese to be such diligent workers. (D. S.)
- * How hard working and friendly the people are! I couldn't believe the attitudes of businessmen towards women in the work force and I find their drinking and pornography habits disgusting. (K. F.)
- * The most impressive thing about the Japanese Society is the lengths people go to to keep everything harmonious. The language and correct societal behavior all emphasize the sensitivity of the people and situation involved.(E. L.)

II. What will you remember the longest about your stay in Japan?

- * I will remember the friends I made, the "omoiyari" they always showed and the wonderful times spent talking on and on about our different cultures. (E. K.)
- * My homestay experience was great. Being able to stay in an everyday environment was one of the best ways I gained some of my perspectives of Japan. (A. S.)

III. Did your stay in Japan give you a new perspective on US-Japan relations or the role of Japan in the world community?

- * Many books about Japan make huge generalizations about this country. Now that I visited, I realized that among Japanese people there are also many different ways of thinking. (P. B.)
- * Yes, I am much more aware of the importance of open communication between the U.S. and Japan; I feel the Americans need to know much more about the Japanese culture and business. I think Japan's influence and contribution to the world community will continue to reach even higher levels. (E. K.)

IV. Any thoughts on Inter-University Seminar House or the life here?

- * The Seminar House is great. The best part is the service and people who work here, who are some of the nicest people I have ever met. Don't change it! (R. S.)
- * The motto of "Plain Living, High Thinking" is a perfect description for the peaceful and pleasant atmosphere of the Seminar House. The attitude here is so friendly and relaxed that it makes learning much more enjoyable! (E. K.)



広野良吉成蹊大学教授の講義を聞く(国際セミナー館)

予 告

●第139回大学共同セミナー

主題 巨大技術と人間
 期日 1987年3月13日～15日(金～日)
 募集人員 70名(社会人も可)

◇基調講演

- I. 海洋情報都市——日本の未来を拓く巨大プロジェクト——
 電気通信大学教授 寺井精英氏
- II. 工業技術の本質と限界——部分システムの進歩と全体システムの荒廃——
 中京大学教養部助教 河宮信郎氏

◇ゲスト講演

宇宙開発と日本人
 宇宙開発事業団理事長 大沢弘之氏

◇セクション演習とシンポジウム

- A. 情報巨大技術の可能性
 A-I 海洋情報都市
 電気通信大学教授 寺井精英氏
- A-II 複雑さへの挑戦としてのコンピュータ技術
 新世代コンピュータ技術開発機構次長 横井俊夫氏
- B. 巨大技術と有限な地球——システム論と熟学の視座から——
 中京大学教養部助教 河宮信郎氏
- C. チェルノブイリの警鐘
 理化学研究所研究員 槌田 敦氏
- D. 技術、教育、経済制度
 東京大学経済学部教授 宇沢弘文氏
 一橋大学経済学部助教 室田 武氏
- 運営委員
 学習院大学理学部教授 江沢 洋氏
 一橋大学経済学部助教 室田 武氏
 青山学院大学経済学部教授 坂本百大氏

●第140回大学共同セミナー

主題 現代社会と思想の地盤がえ
 ——象徴的なものの社会科学——
 (仮題)
 期日 1987年5月22日～24日(金～日)
 運営委員 信州大学教養部助教 山本哲士氏
 東京経済大学経済学部助教 福井憲彦氏

◇問い合わせ先=企画室 ☎0426-76-8532

- テム
 文化シヤッター
 大七証券
 東芝プロセスソフトウェア
 正興
 ティージャーケー
 (個人利用)
 金沢医科大学助教 関 善道
 芝浦工業大学教授 十代田知三
 東京農工大学研究生 S・オーエン
- 日本大学講師 中西 裕一
 法政大学講師 千葉 英明
 東京都立大学建築工学科構造材料系
 セミナー
 青山学院大学教授 大矢知浩司
 中央大学教授 下村 康正
 成蹊大学教授 藤井 重昭
 千葉大学教授 森 良治
 東京都立大学教授 建資
 成蹊大学文化学科有志
 早稲田大学講師 高橋 岩和

- 東海大学教授 師岡 孝次
 明治大学教授 長谷川昭彦
 慶応義塾大学有賀・益田研究室
 慶応義塾大学教授 石川 明
 東京理科大学教授 横山 雄一
 杉野女子大学生自治会
 一橋大学教授 石 弘光
 青山学院大学青山キリスト教学生会
 中央大学経済学会
 明治学院大学教授 宮野 太郎
 法政大学教授 松尾 彬
 一橋大学教授 山本 武利
 東海大学教授 坂田 長生
 東京都立大学生物学ゼミ(1・2年)
 東京都立大学生物学ゼミ(3・4年)
 法政大学助教 山本 健児
 日本大学17・18世紀フランス美術研究会
 上智大学教授 高野 雄一
 東京理科大学教授 狩野 紀昭
 東京都立立川短大教授 吉田 幸弘
 東京国際大学教授 高橋 宏
 東京純心女子短期大学卒業 業修養会
 大月短期大学教授 村越 洋子

- 東京神学大学全学修養会
 日本工業大学硬式野球部
 国士館大学助教 堀 直人
 関西学院大学ラグビーフットボールクラブ
 東洋大学教授 山下袈裟男
 日本女子大学附属高校高校生活研究
 セミナー
 現象学解釈学研究会
 第137回大学共同セミナー
 現代資本主義研究会
 第7回社会学合同セミナー
 国際教育交換協議会CJBS P
 日本小児神経学会
 日本精神科看護技術協会*
 ルソール合奏団
 弓町本郷教会CS教師会
 日本作業療法士協会教育部
 すみよい環境をつくる東京住民運動
 連絡会
 日本バキスタン協会
 八王子たのしい授業研究会
 本所緑星教会
 野方町教会

新年度の利用料金は据置きです
 利用者の方々の負担増を極力
 避け、施設の補修・改善等によ
 する支出増は、利用率のアップ
 で賄うという従来の方針を、こ

の一年間なんとかかきたいと思
 じます。
 経営の健全性を確保するため
 に、年間を通して、一層のご利
 用を切にお願い申し上げます。

- ELI
 日本レクリエーション協会
 構造計画研究所*
 日本電気
 オリエンメント時計労働組合
 セリオン美容室
 中野輸送*
 酒井薬品*
 ベスト外国語学校
 東芝プロセスソフトウェア
 日電アネルバ*
 アイ・エム・エス
 アイワイルド**
 多摩中央信用金庫
 八王子青年サークル連絡会
 伸樹社

- チャンピオン美容室
 小西六写真工業
 レストラン西武労働組合*
 正和電設
 リンクシードシステム
 ソフトウェアマネジメント
 ヒューマン・サイエンス研究会
 日野市役所
 久光製薬
 (個人利用)
 産業能率大学教授 山田 善靖
 駒沢大学卒業生 土居 宏成
 マックマスター大学教授(カナダ) ジョン・バイルス
 東京農工大学研究生 S・オーエン

○編集後記○

本号は昨年9月から11月の活動状
 況を掲載しましたが、中でもトップ
 ニュースは、75泊という、開館以来
 の最も長期の滞在グループを迎え入
 れたことでしょう。米国10大学の学
 生が参加した「日本の経済・経営研
 修セミナー(秋学期)プログラム(主催・
 国際教育交換協議会)がそれです。
 一行11名とレジデント・ディレク
 ター、セクレタリーの13名に表紙に
 登場してもらいました。12月10日
 は、住みなれた「ハウス」に別れを告
 げ、クリスマス休暇までに全員、無
 事帰国したとのことです。
 何はともあれ、業務通信の英文欄
 で、かれらのヴィヴィッドな
 perceptionを、(能)